

[総合的な学習の時間]

校内美術館「こだま美術館」の企画・運営を通じた
「総合的な学習の時間」

- 表現者として学びを立ち上げ 探求していく子どもを育てる単元構成の提案 -

菊地亜弥子*

1 はじめに

総合的な学習の時間は、1998年「生きる力」をはぐくむことを主眼に創設されたが、2008年1月、中央教育審議会では総合的な学習の時間の課題を明示した上で、次のようにその役割を指摘した。すなわち「総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとすることから、思考力・判断力・表現力等が求められる『知識基盤社会』の時代においてますます重要な役割を果たすもの」である。これは、総合的な学習の時間のねらいがこれまでと変わらず、教育課程において重要なものであることを端的に示したものである。その上で、外国語活動の授業時数との関連により、2011年の新指導要領本格実施には、年間時数が70単位時間となることが示されている。つまり、一層質の高い、子どもたちにとって価値ある実践が提案され、総合的な学習の時間の役割が十分に果たされていくことが必要なのである。それぞれの学校が、創意工夫を生かした特色ある学習活動を行う中で、内容の取り扱いの改善点として指摘された①探求的な学習として充実 ②地域や学校、児童の実態に応じた内容 ③体験活動と言語活動の充実 について検証し、取組を行うことは喫緊の課題であるといつてよい。そこで、総合的な学習の時間の中心課題と思われる探求的な学習を、いかに充実するかを念頭に開発実践してきた単元が、校内美術館「こだま美術館」の企画・運営である。

本研究で扱う、校内美術館の企画・運営について、国内の小・中学校を通して計画的に学校の教育活動として校内美術館を有し、企画運営を展開している学校は、管見したところ見当たらない。単発的な取組としては、1994年、1996年の村上タカシ氏らによる東京都杉並区立和泉中学校での取組¹⁾、1999年、愛知県春日井市造形研究会教育研究部による「99'学校美術館 in 春日井」の取組²⁾、2000年、四宮敏行氏らによる愛知県名古屋市長千種台中学校での取組³⁾がある。しかし、それらの取組は単発であり、教師主導の色合いが強い。また、これらの校内美術館の運営は、総合的な学習の時間における学習材としては、示されていない。

そこで、本研究では、総合的な学習の時間における学習材として、年間を通じて展開する校内美術館の運営を提案したい。あらゆる教育活動を創造、構成していくために学校特性を生かすことは言うまでもない。新潟県にある当校は、造形教育を核とした教育活動をこれまで創造してきた。この学校特性を生かし、1999年カリキュラム開発を行う過程で、子どもたちが企画・運営する「こだま美術館」が立ち上がった。当初は教師の指導性が強い傾向にあったが、学校の空き教室を美術館に改装してから後は、子どもたちの手による活動となってきている⁴⁾。

校内美術館である「こだま美術館」は学習材として以下のような特徴を有する。

- (1) 美術館経営を通して、〈課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現〉という学習活動がスパイラルに繰り返され、探求的な学びを保障できること。
- (2) 美術館経営および、これを通じての課題の追求を重ねることで他者と共同して取り組む学習活動が展開できること。

本研究では、当校の特性を生かした校内美術館の企画・運営を通じ、子ども自らが表現者として学びを立ち上げ、探求的な追求を重ねていくことのできる単元構成を提案し、この学びが単元において十分に機能するための必要要件を抽出することを目的とした。

* 長岡市立上組小学校

2 実践研究の内容と方法

(1) 校内美術館の企画運営を通し、子ども自らが表現者として学びを立ち上げ探求的に学ぶ単元構成

本単元を構成するにあたり、子ども自らが表現者として学びを立ち上げ、さらに探求的に学びを重ねていくための具体的な方策として以下の2点を試みた。

① 体験活動と言語活動をつなぐ課題設定の工夫

先に述べたように、美術館経営は〈課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現〉という学習活動がスパイラルに繰り返され、探求的な学びを保障できることが期待できる。それは、美術館経営そのものが、表現活動を基軸に展開される一つのプロジェクトであるからである。本単元では、年間に子どもの手による企画展を3回実施する。ここで設定された課題は、年間を通じた息の長い探究活動の原動力となる。課題の設定に際し、それぞれの子どもの体験活動と直接結び付いた形で自己決定し、それをもとに言語活動による情報の収集、整理・分析、まとめの活動をいねいに重ねていくものとする。

② 課題の追求のために繰り返される体験活動の場の保障

美術館経営は、個の力ではなしえない。そこには、多くの他者であるとともに学ぶなかま、地域の人々などと学びを共有しながら、試行錯誤を重ねることが求められる。そこで、それぞれの課題に沿いながら体験活動の場を保障することが必須である。

(2) 表現者として学びを立ち上げ探求的に学ぶ単元として機能するための必要要件の抽出

子ども自らが表現者となり、学びを主体的に創造していくことのできる教育活動として、単元が機能するための必要要件を抽出するために、以下の視点から明らかにしていく。

① 他者とのつながりを基軸に据えた単元構成

本研究では、多様な他者との共同を学びの基軸に据えた。ここでいう多様な他者とは、学級集団および学年集団、さらに校内の異学年集団というなかまであり、家族、地域の人々・専門家などの校外で子どもの学びを支える人々である。総合的な学習が、一人の人間として生きる力をはぐくむことをねらいとしたとき、子どもを取り巻き、学びを支える全ての人材は、彼らの学びを支えると同時に、ここではともに表現し、それを分かち合おうとする学習者であると考えられる。表現活動は子どもの生活のあらゆる場でなされる。したがって、他者とのつながりなしに、本単元は成立しない。

② 生きることとして表現活動を行う人々との出会いの場の設定

ここで言う「生きることとして表現活動を行う人々」とは、専門家として表現活動に従事している人々のみに留まらない。自らの存在を確かめるために表現活動に取り組む人々、表現活動そのものを根底から問い直す学び手としての表現者、地域において日々の営みのひとつとして表現を紡ぐ人々など、多岐にわたる。これらの表現者と直接出会い、かかわり合い、その人の生き方にふれることが、子ども自身の生き方を考えることに帰着するからである。自分にとって学ぶこと、表現すること、ひいては生きることの意味や価値を問い直すことにつながる。

③ 表現活動において視点の逆転を体験する場の設定

美術館経営者の視点だけでは、表現活動が十分になされたとはいえない。そこで、自らが表現者の意図をとらえ美術館経営をした上で、視点を逆転する場を設定する。すなわち、学びを総合化しまとめる段階で、自らが企画展の出品者および運営者となることで、年間の学びを総合化する。

④ 子ども自身の振り返りの場の保障

年間を通じた美術館経営には、様々な問題や課題が横たわる。また、子どもそれぞれの追求課題の深まりにおいて、自主性や創造性と大きくかかわる表現という活動において、教師の出場は慎重に見極められなければならない。すなわち、子ども自身による表現の発露を待たなければならない場面では、教師の指導性を厳に慎まなければならない。そこで、子ども自身がじっくりと自己を振り返り書く場、経営における共同グループによる話し合いの場など、振り返りの場が保障されることは必須である。

3 実践の経過と検証

上述した視点から、本実践研究の経過およびその成果を述べていく。主に児童の変容および学びの様相から記述していくこととする。

(1) 単元全体計画

本稿で述べる実践は平成18年度、19年度の2年間の実践によるものである。それぞれ6年生児童を対象としており、

18年度の実践を、さらに19年度の実践によって追試、検証しているものである。

18年度 対象 6年生 男子37名 女子32名(計69名) 19年度 対象 6年生 男子38名 女子37名(計75名)

表1 単元全体計画

単元	平成18年度 つなげよう 知恵と心とみんなの力 (全88時間) 平成19年度 つくりだす! つむぎだす! 動き出す! (全85時間)	
目標	○美術館運営を進める活動を通して、魅力ある美術館運営の仕方を知り、様々な人たちに思いや感動を伝えることができる力を育てる。 ○表現活動にかかわる人の生き方にふれ、学ぶ活動を通して表現すること(=生きること)のよさを知り、自分自身もよりよく生きていこうとする態度を育てる。 ○1年間のまとめとして、自らが出品者となり企画展を運営することを通して、自分自身を見つめ直し、自分も他者も大切にしていこうとする態度を育てる。	
	学習活動	留意事項
4月	こだま美術館について考えよう ・こだま美術館が自校にある意味、先輩から受け継がれてきた意味を考え話し合う。 こだま美術館を運営するために ・美術館を運営するために、必要なことは何かを考え話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・こだま美術館についての取材と意見交換を通し、自分たちが大切に守らなければならないことを確かめる。 ・こだま美術館に受け継がれてきた運営規約を理解し、組織をつくる。 ・運営部、展示部、広報部の仕事とは何かを理解する。 ・近代美術館訪問で解決できなかった課題をさらに質問し確かめる。 ・全体および個の課題を設定する。 ・年度当初に内容を決定するのではなく、学習過程で決定していくことを確認し、美術館の意味や価値を再確認する場とする。 ・アンケートなどから企画展を振り返り、全体課題と個の課題について十分に振り返る。 ・第1回企画展を十分に振り返り、個の課題やめあてをはっきりさせて話し合いを行う。 ・表現者と十分にふれあう場を保障し、その後の振り返りに生かす。 ・授業参観を用いて、オープニングセレモニーを実施し、保護者参加とする。 ・引継ぎを通して1年間の学びを振り返る。
5月	近代美術館から学ぼう ・直接美術館を訪れ、各部に分かれて仕事のポイントや要点を学ぶ。 ・事前打ち合わせと事後のさらなる話し合いをする。	
6月	年間を通したわたしたちのこだま美術館の運営を考えよう ・年間を通した課題を設定する。・3回の企画展について見直しをもつ。 第1回企画展(年度の)について考えよう ・企画展の内容について話し合う。 ・各部に別れて具体的な仕事を進めるための話し合いと準備を行う。	
7月	第1回企画展を開こう ・オープニングセレモニーを行う。・20日間の企画展を協力して実施する。	
9月	表現するとは何かを考えよう(1)〈第1回企画展の振り返り〉 ・各部、および個人で学びをまとめて発表する。	
10月	第2回企画展について考えよう ・第1回企画展の内容を振り返りながら決定する。	
11月	第2回企画展を開こう ・表現者の生き方を学ぶ。	
12月	表現するとは何かを考えよう(2)〈第2回企画展の振り返り〉 ・各部および個人の振り返りをポスターセッション形式で発表する。	
1月	第3回企画展について考えよう ・自らが作品出品者となる意味を考え話し合う。	
2月	第3回企画展を開こう ・こだま美術館への思いを十分に振り返る。	
3月	表現するとは何かを考えよう(3)〈第3回企画展の振り返り〉 ・1年間の学習を振り返り、話し合う。 こだま美術館を5年生に引き継ごう	

(2) 繰り返しの体験活動により追求を深める子ども

学習の出発に際し、全体課題を学年で話し合い決定した。6年生は、これまで先輩たちが運営してきたこだま美術館に来館者の立場でふれてきている。自分が6年生になったことで、これまでの伝統を引き継ぎ、運営する立場となることを楽しみに学びの出発点に立った。そこで、こだま美術館が自校にある意味、先輩から受け継がれてきた意味を考え、ウエビング法やブレインストーミング法などを用いて発表し合い、話し合いを深めた。「こだま美術館は、学校、地域の宝物」「地域のみなが楽しめる美術館運営」「出品者の思いを考え、大切に作る」という内容が確かめられた。そこで、年間を通した全体の課題が「出品者=表現者の思いや生き方から学ぼう ~表現するとは何か~」と設定された。

こだま美術館を運営するためにこれまで受け継がれてきた運営規約「こだま美術館運営のきまり」に従い、運営部・広報部・展示部の役割を決定した。自らの役割分担を明確にして市内の県立近代美術館を訪問し、そこでの学びをもとに、全体課題を深める形で個人課題が設定された。さらに、3回の企画展運営という体験活動を重ねることで、子どもたちは追求を深めていった。

たとえば、A児の追求の深まりについて以下に述べる。A児は18年度の実践において展示部に所属した。近代美術館訪問の際も「展示をするときの絵の高さや間隔」「学芸員さんが展示をする時に一番大切にしていることは何か」などと質問し、「表現者の思いを伝える展示と解説とは」と個人課題を設定した。当校の運営規約では、展示部が企画展開催中の解説員も務めることとなっている。18年度の第1回企画展は、5年生の総合的な学習の時間にふれあった特別養護老人施設および市内の緩和ケア病棟の方々の作品展示であった。企画展を経て「ぼくは出品してくれた表現者の思いを伝えることはできると思っていただけ、難しかった。だって、言葉では表現できないようなことを出品者の人は絵にこめて表現しているから。オープニングセレモニーで聞いたことを解説すると来館者は聞いてくれたけど、ぼくの感想を最後に入れると、うなずいたりしてもっと真剣に聞いてくれた。表現者の思いを伝える解説とは、

まずぼくが表現者の作品から、何を感じるかが大切だと思った」とし、その後の課題を「表現者の思いを伝えるためには」とした。2回目の企画展で、近隣の長岡造形大学の学長から「デザインとは」という話を聞く中で、「表現者の思いを伝えるために、真剣に話を聞いた。ぼくが話を聞いて、出品者の気持ちを解説することも表現することだと思った。だから、表現者の思いを感じて解説をしたり、パンフレットや垂れ幕を作ったり、みんなでやっていることが全部表現すること」と「表現すること」について自分なりに考えを深めていった。ここには、体験を通して、表現者の意図を来館者に伝えようとする解説員としての視点と、自らも表現者であるという気付きに支えられた視点との双方向の学びの深まりがある。さらに、3回目の企画展で自らが出品者となったことで以下のように1年間の学びを結論付けた。

これまで3回の企画展をしてきたけど、いのちとは何か、デザインとは何か、表現とは何かにたどりつくためにしてきたと思った。ぼくは表現するとは、一人ひとりが違うこと、自分の考えをもつこと、言葉や作品以外にもいろいろな方法で表すことだと思う。心で表現する、気持ちで表現することもあると思う。(一部抜粋)

(3) 他者をつながり学びを深化する子ども

① 地域の中にある学校 地域の中にいる私を意識し活動を展開する子ども

受け継がれてきた思いを、取材活動などを通して確かめた。こだま美術館は、地域の宝物であり、自分たちだけが楽しむものではなく、学校中のなかまと地域の方々共有の財産であることが確かめられた。19年度の第1回企画展は「輝け上組！地域の宝！～心と心をつなげよう わたしたちの芸術展」とタイトルが決定された。これは、地域の人々が喜ぶ企画展を開催したいという子どもたちの願いから、地域の芸術家を発掘し展示するという意図で企画された。地域の芸術家と言っても、有名画家ではなく、表現活動を楽しんでいる地域の方々を対象とすることとした。そのために、子どもたちはプロジェクトを組み担当者を明らかにした上で、町内会長を訪ね企画の意図を説明する、出品者を紹介いただく、出品者を訪ね依頼する、作品への思いを取材する、作品を搬入するなどの手順をふんでいった。地域の中にとびこみ、地域の方々とふれあうことなしに企画展は進んでいかない。ここで、子どもたちは、作品を通して、地域の歴史にもふれていく。たとえばB児は、酒蔵を描いた絵画について出品者から絵画にこめた思いについて説明を受ける中で、以下のように感想を記した。

今までは、ただあるなあと思っていただけだったけど、サフラン酒の饜絵(こてえ)は地域の人たちにとって大切だということに気がきました。昔の人も饜絵にして、一生懸命表現していたと思います。(一部抜粋)

これは、企画展を通して表現者とかかわりつながることで得た子どもの気付きである。

② 各部の共同から学ぶ子ども

当校のこだま美術館運営規約では、子どもたちは運営部、広報部、展示部のいずれかに所属する。運営部は、企画展タイトルの原案提出、掲示物の作成、オープニングセレモニーの進行などの仕事を担当する。広報部は、ポスター、ちらし、看板、垂れ幕などの作成、および校内放送を担当する。展示部は、展示と解説員を主たる仕事とする。それぞれの部では、リーダーを中心として決められた時間内で仕事を進めていくための計画が示される。3回の企画展を通じ、同じ仕事を担当することで気付きを深めていく。ここでは広報部の垂れ幕部に所属したC児の学びを示す。垂れ幕は年度の第2回目の企画展の際、作成された。学校行事の芸術祭とタイアップして開かれる企画展であり、多くの来館者が期待できるため、子どもたちは張り切って活動に取り組んだ。19年度の第2回企画展は、長岡市出身の自然画家、松岡達英氏の絵本原画展が企画された。運営部が提出したタイトルの原案から、本タイトルの決定まで、子どもたちの議論が続いた。松岡氏の特別授業を受けた子どもたちの思いは強く、それぞれがこだわりと意思をもっていたのである。議論を経てタイトルを決定していくことで、企画展の意図を共通理解していった。しかし、それを再度、垂れ幕に表現することがC児たちの担当であった。共同制作である以上、垂れ幕の色、デザイン、ロゴの形など、納得した上で作業を行わねばならない。活動後のC児の振り返りである。



写真1 垂れ幕の作成に取り組む子ども

たれ幕の色を決めるのにも苦労しました。私は恐竜絵本の原画展なので、地球の色の緑系がいいと思いました。でも、Dさんは、ふん火をする地球の色のイメージで赤がいいと言いました。「これはいい、これはだめ」とみんな意見を結構きびしく言っていたら、Dさんが「緑系でいいよ」と言いました。私は、自分の意見ばかり言っていたかもしれないと思いました。Dさんは納得しないでもいいと言ったのかなと思います。でも、デザインを決めたら緑に赤のふん火が目立って

いたので「よかったな」と思いました。私も、人の意見をもっと聞こうと思います。でも、真剣にやったからいいたれ幕ができたと思います。(一部抜粋)

表現活動を共同で行うためには、なかまとの意見の確かめ、調整などが必要である。自分に誠実に表現活動をしようと思えば、それだけこだわりや思いは強くなる。そこには他者との葛藤が生じる。しかし、そこで異なる視点にふれ共同していく中で、個では気付かない学びの獲得、共同そのもののよさの気付きにつながっていくのである。

③ 他者と直接つながり有用感をもつ子ども

開館期間中、こだま美術館は、地域、校内の他学年の子どもらに開かれる。ここでは、運営部として受付業務を担当したE児の学びの姿を示す。18年度の第2回企画展は長岡造形大学とのタイアップにより、学生らの作品展示となった。企画展タイトルは「伝えよう芸術 広げよう笑顔展～学ぼう つなげよう わたしたちの美術～」と決定された。本企画展を開催するために、運営部児童は造形大学の教官らから、作品搬入の手順、具体的には梱包の仕方、および梱包のもつ意味を大学で教わった。作品を大切に扱うこと、企画展終了の際には梱包を元通りに行き、出品者への感謝と作品への敬意を示すことである。これは、指導を受けた子どもたちに、表現することの意味についての学びをもたらした。それらの学びの上に、E児は受付業務に当たった。企画展終了後のE児の振り返りである。

大学の先生からは作品のはん入の仕方を教わった。大切に運ばないと作品をつくった人に失礼なことがわかった。ビニールで包むとき、緊張して手がふるえた。私は、芸術祭の日の受付をしました。作品を作った人、ちらしやパンフレットを作った人などの気持ちをちゃんと伝えたいし、たくさんの人に喜んでもらいたかったので、笑顔で受付をしました。1、2年生や地域の人がたくさん来てくれたのでほっとしました。1年生が「かっこいいですね」と言っていたのすごくうれしくなりました。(一部抜粋)

大学の教官ら、多くの来場者、1年生児童と直接ふれあい、つながることで、自らの学びと努力を確認し有用感を実感している姿が確かめられた。

(4) 生きることとして表現活動を行う人々と出会い 自らの生き方を考える子ども

18年度第1回企画展では、特別養護老人施設および緩和ケア病棟の方々、第2回企画展では長岡造形大学の方々、19年度第1回企画展は地域の表現者の方々、第2回企画展は地域出身の自然画家とそれぞれ出会い、直接作品にふれるとともに作品への思いにふれた。これは、表現活動への真摯な姿にふれるとともに、表現者の生き方にふれる活動である。ここでは、19年度第2回の企画展について述べる。地元の自然画家、松岡達英氏を迎えた。企画展に先立ち、松岡氏による授業が行われた。そこでは、自身の表現が故郷の山々などとふれあった原体験に根ざしていること、その大切な故郷が中越地震に見舞われたこと、自然画家への歩みなどが語られた後、実際に野草を手にとりて描くという活動がなされた。野草を大切に手に取り、穏やかな笑顔で語りかける松岡氏に促され、どの子どもも生き生きと表現活動に取り組んだ。その後のオープニングセレモニーでも、自ら恐竜のお面をつけて、恐竜の言葉を代弁するという趣向で現れた松岡氏に、子どもたちは魅了された。その後、感想を記したF児の振り返りシートの記入である。



松岡先生は、恐竜をかくためになるべくうそをつきたくないから、えさなどを実際に見たり食べたりしたり、化石があるアメリカに何度も行ってその場所を確かめると言っていました。ぼくは、この絵がまるで生きているように見えるのは、松岡先生が何度もこだわってかいたからなんだと思いました。松岡先生は絵をかくのが大好きで小さいときからずっとかいていたそうです。大好きなことをずっと続けているのはすごいと思いました。ぼくは、好きでもそんなに続けられないかもしれない。(一部抜粋)

写真2 松岡氏から直接絵画指導を受ける子ども

(5) 表現活動において視点の逆転を体験し 学びを支えてくれた人々への感謝の思いを表現し切る子ども

18、19年度とも年3回の企画展の構成を工夫し、子どもたち自身がそれぞれのねらいをもって運営していった。年度の1回目は、それまでの学びの履歴から知識と体験を総動員して企画にあたる姿、2回目は、地域に開くことを大きなねらいとして企画にあたる姿、そして3回目は自らが表現者となることで1年間の学びを集大成する姿があった。それぞれ子どもたちは、それまでの学びを総合化し、表現することに没頭しながら個人作品、共同作品の製作に没頭していった。作品だけでなく、企画展タイトル、パンフレットなどあらゆる表現に、学びを支えてくれた対象への感謝の気持ちを表現していった。さらに、この体験が、最後に「表現すること」についての各自の考察を深めたのである。

(6) 自身の振り返りの場の保障により、自己および小集団の学びを系統立てていく子ども

以上のように、本実践では、それぞれの活動の後に、充分な個の振り返りと各部の小集団による話し合いの場を確保し、言語にして書くという活動を重視した。シェアリングを行うことにより、気付きや学びは個に留まらなかった。各部のなかまとの気付きの相違や共通点が明確になり、次の企画展に向けて新しい展開を期待できた。

4 実践研究の成果と課題

(1) 研究の成果

本研究は、表現者として学びを立ち上げ探求していく子どもを育てる単元構成を提案し、この学びが単元において十分に機能するための必要要件を抽出することを目的とした。

第一の目的である、表現者として学びを立ち上げ、探求していく子どもを育てる単元構成はなされた。美術館経営に際し、体験活動と言語活動をつなぐ課題設定の工夫をすること、課題追求のために体験活動を繰り返すという具体的な方策により、子どもは、企画展の運営を試みたそのときから、自らの追求を深めていった。前述したA児の様相は、体験活動と直接結びついた形で課題を自己決定し、〈課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現〉という学習過程を繰り返したことにより、子ども自身が、スパイラルに学びを高めていったことを示している。美術館経営という表現活動を基軸に展開された一つのプロジェクトにおいて、3回の企画展運営という具体的な体験活動の繰り返しにより、子ども自身が課題をじっくりと探求することを可能とした。

第二の目的である、この学びが単元において十分に機能するための必要要件の抽出については以下の4点が確かめられた。(1) 他者とのつながりを学びの基軸に据える (2) 生きることとして表現活動を行う人々との出会いの場を設定する (3) 体験活動において視点の逆転を体験する場を設定する (4) 子ども自身による振り返りの場を保障することである。子どもを取り巻く全ての人材は、子どもの学びを支えると同時に、ともに表現し、それを分かち合おうとする学習者であるという視点から、多様な他者とのつながりを基軸に据え、表現者の生き方に直接ふれる場を設定した。これにより、子どもは自らの生き方を振り返り、表現することや生きることの意味や価値を問い直していった。また、表現活動において視点の逆転を体験する場を設定したことにより、子どもは年間の学びを総合化することができた。そこでは、子ども自身による振り返りの場が保障され、自己の課題に真摯に向き合う姿があったことは言うまでもない。以上のことから、上記の4点は必要要件として抽出された。

(2) 今後の課題

本研究の課題は以下の2点があげられる。

第一に、単元を構造的に示せなかったことである。それぞれの活動内容のもつ意味や価値の上に立った、活動の関連は示されなかった。また、各教科との関連が図られていることはいうまでもないが、本研究ではその関連が言及できなかった。そこで今後は、単元構成を構造的に示すとともに、2011年の新指導要領本格実施に向かい、時数運営も含めた各教科との有機的な関連を単元構成に加えていきたい。

第二に検証方法の検討である。本研究を検証するにあたり、その成果を数値で示すことには限界があると考え、児童の学びの変容や様相からその有効性を検討した。今後は、より多くの分析を通してさらに質的な検証を深めていきたい。

本単元を実践するにあたり、筆者自身が子どもたちという個の立ち上がった表現者の表現に魅了されることが度々あった。また、全教育活動を通じ、積極的に自己を開き、表現活動に取り組もうとする子どもの姿があった。子どもたちは表現したいのである。美術館経営という学習材により、教師も子どもも楽しく、やりがいを感じながら活動できた。教師も、地域住民も一緒になって表現活動に取り組むことが、何よりも子どもたちの学ぶ意欲をかきたてることを忘れずに、今後ともに学んでいきたい。

引用・参考文献

- 1) 村田 真・村上タカシ共編『ドキュメントIZUMIWAKU』1997
- 2) 春日井市造形研究会教育研究部『美術館がやってきた99'学校美術館 in かすがい』日本文教出版株式会社 2000
- 3) 四宮敏行『学校が美術館 発想から実現までの記録』美術出版社 2002
- 4) 結城和廣「造形教育を学校経営の柱に一空き教室が子どもたちの美術館―」佐々木秀樹編『FORME No280』日本文教出版株式会社 2006

文部科学省『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社 2008